

# 伊奈波神社の御田植祭と神田

伊奈波神社教学研究員

寛 真理子

神社の祭礼にも、時代によって変化があります。祭礼の内容だけでなく、祭そのものが姿を消したり、あるいは新たに生まれたりするのです。岐阜市歴史博物館に寄託されている御社宝の中には、かつて伊奈波神社で行われた御田植祭に関わる文書や写真がありました。今回は、今では姿を消したこの祭礼を紹介します。

御田植祭は、稲の稔りを祈って寺社や皇室の田で行われるもので、有名なのは千葉の香取神宮、大阪の住吉大社、三重の伊雑宮(いざわのみや)でしょう。岐阜県内では不破郡垂井町の南宮大社の例大祭で御田植神事があり、ほかにも全国各地で伝えられ、年頭または田植え期に行われています。伊奈波神社の御田植祭は田植えの時期で、その始まりは残念ながら不明ですが、明治二十五年(一九二二)四月に岐阜市役所から伊奈波神社祠官の塩谷幸満

●神職は本殿に復座し、撤饌・閉扉のち退下。

写真1は祭の参加者の記念写真です。早乙女二十一名と、そのうしろ中央には烏帽子をつけた鍬役・柄振役・苗配り役・田植え歌役・綱役が、その右には総代が並んでいます。薄化粧をした早乙女は花笠をかぶって揃いの袴と肩巾(ひれ)をまとい、手甲をつけて緊張した面持ちです。写真に写っていない以外に、歌役と田楽の笛方・太鼓・伶人(れいじん)、合わせて七名がいました。

写真2は、祭のようすを西向きに写したものです。祭式場は四方を笹竹で囲んだ長方形の区画で、上部には注連縄が張られています。奥(西)には鍬役・柄振役・苗配り役が本殿に向いて並び、扇を持つ人は田植え歌を歌っているでしょう。二十一名の早乙女は二列に分かれています。これは雄蝶・雌蝶の列で、雄蝶が雌蝶より一名多かったはず。写真1から、雄蝶・雌蝶は肩巾で区別されていたようです。神官の一人が早乙女のそばに身をかがめ、綱を押さえています。まっすぐ張った綱に沿って苗を植えており

にあてて、御田植神事の詳細について届け出るようにとの通知が出されています。神事の有無ではなく内容についての問い合わせであることから、これ以前から御田植神事を行っていたと思われませんが、式次第や日時などはわかりません。ただしこの年は濃尾震災の直後であり、社殿のほとんどが焼失する惨事にあつた伊奈波神社では、おそらく御田植神事どころではなかったのではないのでしょうか。

そのちしばらく御田植祭の記録は確認できませんが、大正七年(一九一八)六月三十日午前十時に「神田田植祭」を本郷町五丁目の神田において執行するとの通知が氏子総代と神田会委員にあてて出されています。このときには「例年ノ通り田植祭執行」と述べられており、かなり以前から行われていたと推定されます。ただしその場所となる神田は、大

向かい合つて植えながら後退していったでしょう。しかし苗は稲にしては直立しており、地面もぬかるんではないですが泥田ではありません。田植えに先立つて行われる鍬役・柄振役の所作は、田起こしと田ならしです。つまり稲田耕作の最初にあたる土起こしから早乙女による田植えまでを模擬的に行っているわけです。南宮大社の御田植神事でも、田起こし・田ならしのあとで振袖姿の早乙女が松葉の束を植えます。

写真2でおもしろいのは、周りを取り囲む大勢の参拝者たちのようすです。あいにくの雨天で雨傘が開き、中には洋傘も見えます。鍬役たちの後ろには女性や帽子をかぶった男性などがついています。右端からは少女が一人身を乗り出して見ており、早乙女の選に漏れた子でしょうか。神事の最中には田楽歌・田植え歌が奏されたのですが、どのようなメロディーや歌詞であったかはわかりません。また、大正十年が第一回なのですが、続けて行われたかどうか確認できません。もしご存知の方があればお教えく

正五年末に設置されたものでした。農業を守護する五十瓊敷入彦命をお祀りする伊奈波神社には、このときには神領として山林はあるものの田地がありませんでした。しかし大正四年には、大正天皇の即位大札と大嘗祭を前にして、全国の神社で基本財産となる神田を設けて神饌を調えるとともにそこで獲れる種子を頒布して稲作改良の一助としようとする動きが広まっていました。この年九月に伊奈波神社においても神田を設置する呼びかけがなされ、神社御供米・分与粉を採取する田地を寄付するための伊奈波神社神田会が組織されたのです。五反歩の土地取得と記念石標建立などの費用三〇〇〇円余を目標として、大正五年二月から十一月の期間に寄付が募られました。神田会の規約には毎年三月に会員一同の五穀成就・家運長久の祈禱を執り行ない、参拝者に御供物を呈することが定められています。この活動の結果、長良村福光字柿ノ木前(現在は岐阜市)と岐阜市本郷町五丁目の土地合わせて五反弱が寄付され、目標はほぼ達成されました。寄付は大正五年十二月以降です

ださい。

長良の神田は現在では田神町に場所を替えて駐車場となりました。本郷五丁目(今は都通一一七)の神田も駐車場に姿を変えています。都通りに面して「伊奈波神社神田」「反別壹段(二反)四畝七歩」「大正五年十二月設置」と刻まれた石標が建っています。石標が建てられたのは大正七年ころでしたが、ここには寄付の年月が記

から、大正七年六月の時点で「例年ノ通り」と表現するのは、神田とは別の地(その場所は不明ですが)で御田植祭が行われてきたことを示しています。六月三十日には午後二時に大祓の神事も執行されており、この日は大忙しだったことと想像されます。

これ以後も神田での御田植祭は毎年行われたでしょうが、大正十年にはさらに日と場所を改めて御田植式となりました。そのようすは、写真と式次第からかなり詳しく知ることができます。挙行されたのは六月十九日、場所は神社神門の下で、現在の祓所(はらえど)あたりでした。当日の式次第は次のとおりです。

●神職以下一同が本殿に参列、祓式・本殿開扉・献饌・祝詞奏上・玉串拝礼。そのち直ちに祭式場へ行列して行進。  
●一同、各位置に整列。御鍬役・柄振(えぶり)役・苗配り役・早乙女は定めめの服を着用。

●第一合図で御鍬役、柄振役、苗配り役の順で所作を行う。  
●第二合図で早乙女が早苗を植える所作。

●第三合図で一同退出。

されています。また、伊奈波神社社務所前には、大正八年建立の巨大な神田会記念碑が残されています。文章は書家で宮内省御歌所寄人であった阪正臣(はんまさおみ)によるもので、碑の裏面には神田会会員の名前がびっしりと刻まれています。都通りを通ったときや参拝のさいには、これらの記念碑にもぜひ目を留めていただければと思います。



写真1



写真2